英語の新作能『漂炎』
ー２７年目の回顧ー

ジャニーン・バイチマン＊

英語の新作能がまだ少なかった時代に、私は *Drifting Fires* という英語の新作能を書いた。詩人大岡信の訳では題名『漂炎』である。

この論文ではまずこの曲の成立の由来を述べ、上演歴とその受容を紹介しながら、その内容について自分の解釈を述べたい。特にシテの変容とシテとワキの関係について明らかにしたい。

成立の由来、上演歴、受容

私が能を初めて知ったのは 1960 年代であった。当時アメリカの文学界は禅をはじめ東洋文化に興味を持つビートニクの時代であったが、大学時代、兄が持っていたアーサー・ウェイリーの英訳謡曲集 *The Noh Plays of Japan* を読み、強い印象を受けた。序説でウェイリーが西洋演劇と能との違いを明らかにするため、ジョン・ウェブスターの *The Duchess of Malfi*（マルフィ公爵夫人）というイギリスの 17 世紀の劇を能の形式で語りなおしたことは今でも忘れられない[1]。その後、コロンビア大学大学院に入り、私の恩師となったドナルド・キーンの授業で、俳句、和歌、文楽、歌舞伎、能をそれぞれ原文で読んだが、特に能の詩的な美にうたれた。

キーンが編集した *Twenty Plays of the Nō Theatre* に、私の『遊行柳』の英訳 *The Priest and the Willow* も収録していただいた[2]。その後もしばらくひとりで能の翻訳を続けたが、数曲を翻訳してみてから、能の美を英語で伝えるためには、英語で能を書きおろすほかないと思うようになった。英語の新作能をひとつ書いてはみたが、人に見せる程のものではないと思い、机の引き出しに隠した。しかし 1980 年、当時私が日本文学を教えていた上智大学国際部の四年生兼観世流の能楽師であった梅若猶彦にある日、「新作能を書いたらどうですか？」と言われた。これがきっかけで別の新作能を書き、三年くらいかけて何回か書き直して、1983 年に完成したのが、*Drifting Fires* である。

Drifting Fires の初演は 1985 年 8 月 21 日つくば万博で、私の英語台本と茂山あきらで日本語間狂言に演じられた。また、英語の台本とその大岡信による和訳が印刷し観客に配った。型付とシテは梅若猶彦、ワキは遠田修、音楽と地謡担当はリチャード・エマート、間狂言は松本薫、笛は一噌幸政、一味幸弘、小鼓は大倉源二郎、大鼓は大倉正之助、太鼓は三島元太郎、後見須田雅幸だった。

次の年、東京の増上寺の大殿でも上演された。その時も、また英語で演じられたが、大岡の翻訳が字幕として使われて効果的だった。梅若とエマートは同じく務めたが、ワキはデビッド・クランドルだった。そして、間狂言は私が作って、善竹十郎が演じた。舞台となる大殿の床に、ロウソクを並べ、揺らぐ炎による幻想的な雰囲気を狙った。

また 1992 年の３月に別の演出と音楽でフロリダ州立大学の New College の学生たちによっ

＊大東文化大学教授

ても三回上演された。そのあと、1993年の5月に米国カリフォルニア州のYuriko DoiのTheater of Yugenで、また新しい演出と音楽で14回上演された。土井自身が監督で、シテはLibby Zilber, ワキはTohoru MasamuneとMartha Estrella交互で、音楽はDorothy Moskowitz-FalarskiとMasa'aki Takanoだった。

21世紀に入り、2005年の10月に日本舞踊家五条雅之助が橋浦勇の演出・振付で、ホルストの『火星』、長澤勝俊の『第一章』、三木稔の『相聞』、プロコフェエフの『第4楽章』の現代音楽を使用して国立小劇場で舞踊として舞った。このように、さまざまな演出で、日米で合計20回上演されている。（インドからも問い合わせがあったが、あいにく実現できなかった。）参考資料として、つくば万博公演のプログラムと写真を添付する。

つぎにこの曲の成立経過を書いておきたい。能のテーマはさまざまあるが、夢幻能という、亡くなった人がこの世への執着のため幽霊になって戻ってくる筋が代表的なものであることはよく知られている。私もこれをモデルにしたが、問題はシテをどういう背景をもつ人にするかであった。あまり欧米的では能にそぐわないが、あまり日本的であっても英語で書きにくい。結局、シテはどの国の人とも定めず、地球が滅びたのちの人類最後の者の幽霊ということにした。この世への愛のあまり、世界が滅びてもそこを離れず、数千年の間その軌跡を漂っている幽霊である。地球が炎になって、その炎も雲のように漂うから*Drifting Fires*と名づけた。大岡信はそれを『漂炎』と訳した。

大岡は能をどうすれば現代的に書けるかという問題に以前から興味を持っていたというが、*Drifting Fires*の場合、これを文語に訳すべきか、あるいは口語に訳すべきかが一番難しかったということである。結局、口語まじり文語におちついたという。美しい日本語に訳してくださった。文学評論家の長谷川泉は増上寺での上演の時その訳を読んで「巧緻」であり、その翻訳字幕がパーフォーマンスを援助したと述べている[3]。

大岡の訳中、私が面白いと思ったのは、日本語の能や和歌から英訳引用した部分で、原作の言葉を使わず、その代わりに、日本語からの英訳を再和訳したことである。たとえば、前場でシテの登場時、

サシで歌う部分：
And the aftertaste of love,
Endless
As my life
On this melting frame of earth

大岡の和訳：
この地球という溶けてゆく塊の上
わが命さながらに終わりなき
愛の残り香だけを残して

ここのaftertaste of love, endlessという表現は金春禅竹の『定家』の「後の心ぞ果しもなき」からの自由訳であるけれども[4]、大岡の和訳ではそれが「終わりなき愛の残り香だけを残して」となる。

もう一人の評論家、長尾一雄の評の中で、私にとって印象的だったのは「古典的な能の構成法にほぼ忠実であることは明らかである。... こうして限りなく能に近く、また遠い」と結んだ部分である[5]。つまり、この曲は古典能の構成とテーマに忠実でありながら、古典能との基本的な違いもある、その矛盾である。確かにその通りである。まず、規模に違いがある。長谷川が言うように、「全体として、宇宙の生成・消滅にかかわるスケールの大きな内容」である。時間は「世界終焉後のある時」であり、「死滅していく太陽の熱で、地球と地球上のあらゆる生物が破滅させられて久しく、その残骸は一面の炎と化し去っている」ところから始まる。それから、もう一つの違いは、シ

テの複雑な心理だろう。以後、これについて述べる。

シテの変容

Drifting Fires のシテは、そのアイデンティティ（正体）が三回変容する。最初の変容は前場の終りで、記憶のない生物から、自分が「最後の人間の幽霊」であることを思い出した女性への変容である。第二回の変容は後場の第３部分の終りで、彼女がすべての死者と自分の同一性を確認するとき起きる。第三回の変容はこの内的な変化に引き続く外的変容で、彼女は無へと戻ってゆく。

旅人が最初彼女に会うとき、シテは自分の眼前で地球が破壊されたというトラウマを繰り返し繰り返し生き続けている。それはあまりに悲惨な出来事なので、彼女の心の中から他のことすべてを追い出してしまっている。旅人が地球の噂をするとき、彼等はそれと知らずに、シテを現実へと引き戻し得る唯一の言葉「地球」を発したのである。シテが彼等に宇宙について語るよう要求するとき、その外面的理由は、彼等がたしかに同じ銀河系の出身であることを証明させるためであるが、その裏には、自分が失った世界のことを聞きたい、自分が愛するものについて語りたいという、子供のような餓（かつ）えがある。

旅人が、彼等にもまたシテにとってもなじみの昔話である宇宙の話をはじめると、シテの記憶は呼び覚まされ、宇宙の驚異に引き込まれ、生命と人間のはじまりの美しさを思い出しはじめる。しかし話が進むにつれて、物語は彼女を、あの恐ろしい最後の日々、自分自身の死、そして自分の知る限りすべての生命の終りへと連れ戻す。シテの話が自分自身が死んだところまで来たとき、彼女は話を止めなければならない。というのは、彼女にとってはそれが話の終りであり、彼女は今や心理的な無の空間にいるからである。このとき、彼女はまた自分の真のアイデンティティが「最後の人間の幽霊」であることを明かす。ここで彼女の第一の変容――自分が何であるかをほとんど忘れ去った未知のふしぎな生物から、自分自身を思い出した存在への――が実現する。

後場でシテが戻ってくるとき、彼女は記憶に満ちた幽霊であり、これは前場で見た、ほとんど記憶を失った生き物とは完全に対照的である。後場の第２部分で、彼女は地球の美しさと、いかに自分がそれを愛したかを想起する。（この部分には、パブロ・ネルーダ、柿本人麻呂、ケネス・レクスロスの詩からの言葉が織り交ぜられており、能『羽衣』の引喩もある。）：

Infinite air,
The morning thick like milk,
Sweet matter.....
Salt, dust of the sea,
My tongue received
A kiss of the night sea
From you.....

Earth, my earth.....
So beautiful even angels came down
To bathe in your clear waters.

Now you are gone, yet I have come
For this is all that I have left of you.

My sorrow is so wide
I can not see across it;

And so deep I shall never
Reach the bottom of it.

In the heart's thicket we travel across
A summer of tigers.

後場の第３部分で、彼女は法外な主張をする―

—自分はかつて生きたすべての人間である、と：

And before the End,
There were many ends,
For each time a human being died,
A world was lost.

I was the starving child,
Belly distended,

Bones like thread,
Who died in her mother's arms.

I was the man weeping blood

Who let himself be stretched on the rack
And roasted alive for love of God.

I was the mother lost in childbirth

Whose soul ascended the clouds like a bird,
A pillar of smoke for a shroud.

そしてその一人一人に、自分を通じて生き返るように訴えるのである：

Come down to be born again, my sister!
Give me your hand from the flames, my brother!
Cleave your bodies to mine like magnets!
Flow into my veins, into my mouth!
Speak through my words and through my blood!

ここで、ことに「Come down to be born again, my sister!」ではじまり「I am the End」で終わる部分はこの曲のクライマックスである。また、ここには内的な変容が表現される：彼女が失ったすべての者、かつて生きたすべての人間を、自分の中に取り入れようとし、これから彼女は、どこに行こうとも、失った世界を自分の中に持って行く。それが、彼女は完全に生きており、また同時に完全に死んでいるということであるので、こういう風に歌う：

I am stone; dark stone.
I am air; bright air.
I am the Beginning,
And I am the End.
I am the End.

生と死の境に立ちながら、喜びと涙を混ざった、宇宙のための舞うを舞う。

Now the Earth is turning and turning with it,
I shall dance.
Watch me now, and remember the world!
Watch me with tears,
Watch me with joy!

舞いながら、幽霊が地球への執着から解放される。これは、幽霊の最後の変容であるが、この内的な変容とともに、地球の外的な変容もある。地球の廃墟の赤い炎と黒い灰が解消し、青と紫の原始の気体に変じて、天地創造の全過程が繰り返されるようになる。

And as she danced,
The flames thinned and fell away,
Gossamer clouds with tails of fire
Spiralled slowly through space.
Here and there blue and violet gases
Gleamed in the light of distant stars
Then disappeared,
Like foam upon the midnight sea.

これは、ひとつの世界の終わりであると同時に、またもう一つの世界の始まりでもあろう。それを

示すように、今や遠くからかすかな音が聞こえてくる：

From far across the River of Heaven,
I hear the plovers' faint, cold cry ——
Or is it only the endless echo
Of the Great Beginning?

この音に惹かれて滅びた世界の周りの空虚にむけて幽霊が一人で旅立つ：

Earth's atoms drifted through space,
Carrying fragments of memory into the darkness.
"And I shall go too, I shall go with them,"
She said, and stepped out into the Galaxy.
She mingled with the swirling clouds and disappeared.
Mingling with the swirling clouds, she disappeared.

私は日本文学を 1960 年代から研究しはじめたが、早くから和歌の本歌取と、連歌と能の前時代の作品への暗示の虜になった。自分の個性をよりよく表現するため、前の人の作品から言葉とイメージを借りれば、効果的になるというパラドックスも無限に面白かった。*Drifting Fires* を *Asian Theatre Journal* という学術雑誌に発表した時、引用された作品の出典を脚注にすべて挙げておいたので、興味がある読者は参照して頂きたい[6]。ここでは Asian Theatre Journal に説明されていない暗示のいくつかを説明し、またその脚注にないことを少し付け加える。

後場の第３の部分のうち For each time a human being died, A world was lost というのはユダヤ教の教えであり、I was the starving child, Belly distended, Bones like thread, Who died in her mother's arms は、ビアフラ難民の親子の写真から来ている。I was the man weeping blood Who let himself be stretched on the rack And roasted alive for love of God では、スペインの異端審問を暗示した。I was the mother lost in childbirth Whose soul ascended the clouds like a bird, A pillar of smoke for a shroud というのは、人麻呂の亡妻についての長歌（『万葉集』２：210）中「かぎろひのもゆる荒野に白たへの天領巾隠り鳥じもの朝立ちいまして」からのイメージである。後場の第５の部分 And I shall go too, I shall go with them, She said, and stepped out into the Galaxy の部分を書いた時、私の頭の中で、シテのイメージは「もう人間であることをやめた千恵子に／恐ろしくきれいな朝の大空は絶好の遊歩場／千恵子飛ぶ」という高村光太郎「風にのる千恵子」の喜びと悲しみの混ざったイメージと重なり合った。

また、The River of Heaven は日本語の「天の川」の直訳である。英語では普通 Milky Way というが、あえて直訳した理由は、ここで紀貫之の『拾遺和歌集』224 の「思いかね妹がり行けば冬の夜の河風寒み千鳥鳴くなり」のパターンとイメージを借りたからである。貫之の歌では川からくる千鳥の鳴き声に恋憧れている人の心の声が聞こえるように、空虚の向こうからくるかすかな音に幽霊が自分の憧れの響きを聞くだろう。それは、まだ響きつづける宇宙の始まりの音でもあろうか。

最初から、私はこの曲が能形式だけではなく、いろいろの形式で演じられることを望んだ。そのため、*Asian Theatre Journal* の論文には、能の初歩的解説とともに、自分なりのこの曲にたいする個人的な解釈もあとがきに付け加えた。その一部分は上で説明したシテ（幽霊）の変容であるが、もう一つは、シテとワキ（宇宙の旅人）の関係である。以下、それについて述べる。

ワキとシテの関係

Drifting Fires で最重要な変容は最後のもの――シテを過去への執着から解放する――である。古典能と同じように *Drifting Fires* においても、その変容はワキの触媒的な存在によって可能となる。しかしその意味でのワキの重要性から見て、大部分のワキが受動的なことは驚くほどである。ワキは舞うことがない。ワキの役割は大部分、シテに話したり舞ったりする気を起させること、そしてシテのそれらの演技を観ること、に限られる。

シテ／ワキの遭遇とオーソドックスなフロイド流精神分析における患者／精神分析家の関係の相似は明らかである。シテによる自分の物語の最終的な再話と再演は、精神分析におけるトラウマティックな（心的外傷を与えた）出来事の再話に対応する。そしてワキは、この再話を静かに、コメントを加えずに受けとるのだが、これは分析家がわざと自分の個人性を抑制し、患者が自分自身の精神を写す鏡のようになって、批判的でない中立の雰囲気の中で、患者みずから矛盾を解決できるように仕向けるのと同様である。

しかしワキと精神分析家の両方において、この見かけの受動性の裏に、深い同情が潜んでいる、あるいは潜んでいるべきである。この同情は、あからさまに表現されはしないが、内面的には活発かつ強力であって、悩む心の主が自分自身と折り合いをつけ得る雰囲気を作れなくてはならない。

これらの観察を *Drifting Fires* に適用すると、ここでのドラマは旅人と幽霊の関係の、外面的なダイナミックス――お互いに対する感情がいかに進展していくかなど――に存するのではなく、幽霊が彼女自身の過去と折り合う内的進化に存する、ということが明らかである。この意味でこの作品は、多くの夢幻能と同じく、劇的というより抒情的であり、演ずる場合はリアリズムより能の抑制された表現に合う。

大部分の夢幻能において、ワキのシテに対する同情は、ワキが僧であり、魂を救う職業であることから由来する。しかし *Drifting Fires* の場合、旅人の幽霊への同情の理由はそれほど明らかでない。しかしまさにこの曖昧性を、神秘さと深さの感覚、すなわち能の美学的理想の一つである幽玄さを生むために用いることができる。旅人は宇宙の歴史を十分に知っており、また地球が如何に終りを迎えたかも知っている。彼は自分が地球の終りに逃げ出したものたちの子孫である可能性を考えたこともあるだろう。すなわち、彼は彼自身の世界の先祖のところへ訪れたのかも知れず、また彼の幽霊への興味は、宇宙的孤独感や科学的好奇心だけでなく、深い近親感にも由来するのかも知れない。しかし、この可能性を表面に出すことは、旅人／幽霊の関係に過大な力点を置くことになる。旅人と幽霊が血縁であるかも知れないという可能性は、観衆が意識上では気付かず、後になって思い返してはじめて気づくほど、微妙に示されなければならない。旅人と幽霊の間には、ことばの外に存在する、曖昧な、しかし不思議に感動的なつながりの感じがあるように。世阿弥が『風姿花伝』の有名な部分に書いたように、「秘すれば花なり。秘せずは花なるべからず」である。

終りに、私はこの曲を横道萬里雄による能の構成[7]に従って作ったが、同時に上で述べたように、この曲が他の演劇形式で上演されることを期待している。また、言葉の面では、上で説明したように、さまざまな国や時代の作者から表現を自由に借り、自分の言葉と織り交ぜた。幽霊のシテが世界人であるように、言葉も世界文学的な味もあるように努めた。

図１　プログラム（つくば万博）・筆者蔵

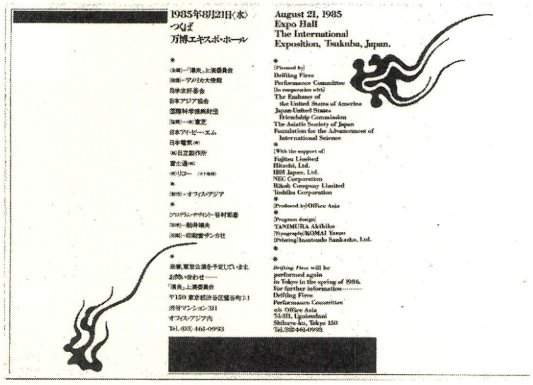

図２　プログラム（つくば万博）・筆者蔵

図３　ワキ 遠田修（つくば万博）・撮影 管洋志

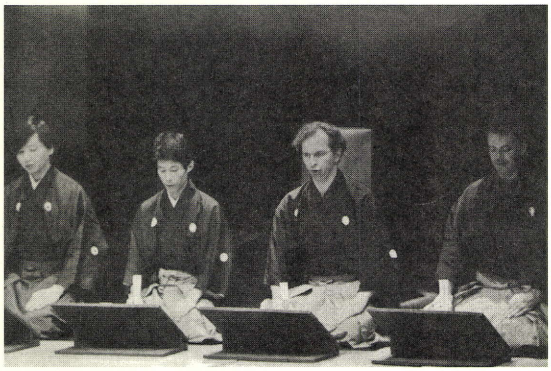

図４　地謡 左より八田達弥、松井彬、リチャード・エマート、スティーヴン・コーミー（つくば万博）・撮影 管洋志

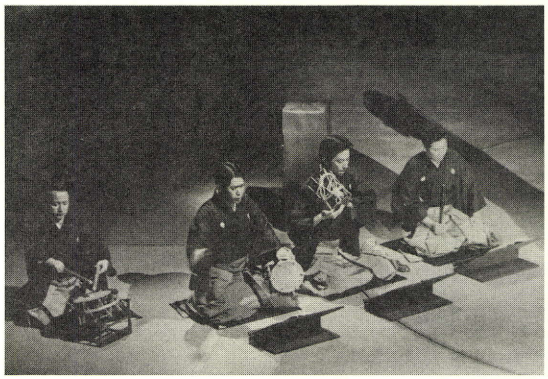

図５　囃子方 左より三島元太郎、大倉正之助、大倉源二郎、一噌幸政（つくば万博）・撮影 管洋志

図６　後ジテ　梅若猶彦（つくば万博）・撮影 管洋志

図７　前ジテ　梅若猶彦（つくば万博）
・撮影 管洋志

図８　後ジテ　梅若猶彦（つくば万博）
・撮影 管洋志

註

1　Ivan Morris, ed. *Madly Singing in the Mountains: An Appreciation and Anthology of Arthur Waley,* Harper Torchbooks (Harper and Row), 1972, 310-311. (Waley, Arthur. *The Noh Plays of Japan. Allen and Unwin,* London, 1921 にもある。)

2　Kanze Kojirō Nobumitsu, The Priest and the Willow (Yugyō Yanagi), translated by Janine Beichman, in Donald Keene, editor (with the assistance of Royall Tyler), *Twenty Plays of the Nō Theatre*, Columbia University Press, New York and London, 1970, 219-236.

3　長谷川泉「英文能 Drifting Fires (漂炎) を観て」『日月』第 30 号 , 1986 年 12 月 , 94.

4　金春禅竹「定家」 小山弘志 , 佐藤喜久雄 , 佐藤健一郎校注・訳者『謡曲集一』日本古典文学全集 33, 小学館 , 1973 年 , 308.

5　長尾一雄「能に近く、そして遠く：バイチマンの『漂炎』を見る」『能楽タイムズ』第 403 号 , 1985 年 10 月 1 日 , 6.

6　Janine Beichman, Drifting Fires: An American Nō. *Asian Theatre Journal.* 3：2, Fall, 1986, 247-250.

7　横道萬里雄「解説」『謡曲集』上・下 , 日本古典文学大系第 41・42 巻 , 岩波書店 , 1960 年 . 英訳は Hoff, Frank, and Willi Flindt, *The Life Structure of Nō: An English Version of Yokomichi Mario's Analysis of the Structure of Noh,* Tokyo, Concerned Theatre Japan, 1973.

参考文献

Beichman, Janine. Ritual and Theater in Nō. *Research Report of University of Library and Information Science* / 図書館情報大学研究報告 , 2：1, 1983 年 6 月 , 55-71.

————————. Drifting Fires: An English Nō and its context. *Nitobe-Ohira Memorial Conference in Japanese Studies*, University of British Columbia, May, 1984.

————————. 'Drifting Fires'-An English Noh Play-. *Look Japan*, November 10, 1985, 6-7.

————————. Noh in English: Encounters Far and Near. *Japan Quarterly,* 33 (1), January-March 1986, 88-92.

————————. Drifting Fires: An American Nō. *Asian Theatre Journal.* 3：2, Fall, 1986, 233-259.

————————. Drifting Fires: An American Nō, Translated by Ooka Makoto 漂炎 , ジャニーン・バイチマン・作 , 大岡信・訳 , 川村ハツエ『能のジャポニスム』かりん百判 13, 七月堂 , 1987, 189-225.

文化往来 「成功だった英語による新作能」,『日本経済新聞』1986 年 9 月 22 日朝刊 .

長谷川泉 「英文能 Drifting Fires （漂炎）を観て」『日月』第 30 号 , 1986 年 12 月 , 94-96.

Hoff, Frank, and Flindt, Willi. *The Life Structure of Nō: An English Version of Yokomichi Mario's Analysis of the Structure of Noh.* Tokyo, Concerned Theatre Japan, 1973.

ジャニーン・バイチマン 「能はどこまで祭儀か」『文学』

51：7, 1983 年 7 月 , 134-142.
――――――――――「出を待つ英語新作能」『日本経済新聞』1984 年 12 月 21 日朝刊 , 32 面.
――――――――――「能に魅せられて」『向上』第 898 号 , 1986 年 12 月 , 18-20.
Kanze Kojirō Nobumitsu, The Priest and the Willow (Yugyō Yanagi), translated by Janine Beichman. In Donald Keene, editor (with the assistance of Royall Tyler) , *Twenty Plays of the Nō Theatre.* Columbia University Press, New York and London, 1970, 219-236.
川井育子　「素顔の研究者 17―日本と " 自然ないい関係 " 日本人より日本人らしい外国人」『常陽新聞』第 934 号 , 1985 年前半 (月日不明).
小町谷照彦校注　『拾遺和歌集』新日本古典文学大系 7, 岩波書店 , 1990 年 .
近藤特派員　「無我夢中―その３―偶然からの贈り物：ジャニーン・バイチマンさん (竹園) 」『さくら』156 号 , 1985 年 7 月 .
金春禅竹　「定家」　小山弘志 , 佐藤喜久雄 , 佐藤健一郎校注・訳者『謡曲集一』日本古典文学全集 33, 小学館 , 1973 年 .
Martin, Maureen A. Student stages Japanese-style play. *Tampa Tribune*, Sunday, March, 1992 (日不明).
Morris, Ivan, ed. *Madly Singing in the Mountains: An Appreciation and Anthology of Arthur Waley*. Harper Torchbooks (Harper and Row), 1972,
長尾一雄　「能に近く、そして遠く：バイチマンの『漂炎』を見る」『能楽タイムズ』第 403 号 , 1985 年 10 月 1 日 , 6.
Waley, Arthur. *The Noh Plays of Japan.* Allen and Unwin, London, 1921.
Yamaguchi Yoshie. East Meets West in English Noh Play. *The Japan Times,* August 13, 1985, 10.
横道萬里雄　「解説」『謡曲集』上・下 , 日本古典文学大系第 41・42 巻 , 岩波書店 , 1960 年 .
「座談会：新たな創造を求めて (1)」　出席者リチャード・エマート , ジェーン・コードリー , ジャニーン・バイチマン , ききて観世編集部 ,『観世』54:1, 1987 年 1 月 , 52-55.
「座談会：新たな創造を求めて (2)」　出席者リチャード・エマート , ジェーン・コードリー , ジャニーン・バイチマン , ききて観世編集部 ,『観世』54:2, 1987 年 2 月 , 40-45.
「座談会：新たな創造を求めて (3)」　出席者リチャード・エマート , ジェーン・コードリー , ジャニーン・バイチマン , ききて観世編集部 ,『観世』54:3, 1987 年 3 月 , 78-81.
「座談会：新たな創造を求めて (4)」　出席者リチャード・エマート , ジェーン・コードリー , ジャニーン・バイチマン , ききて観世編集部 ,『観世』54:4, 1987 年 4 月 , 74 － 77.

参考資料

DRIFTING FIRES
AN AMERICAN NÔ

By Janine BEICHMAN
Translated by OOKA Makoto

PERSONS
DOER：The GHOST of the Last Human Being (appears as WOMAN in Act One, in true form in Act Two)
SIDEMAN：A TRAVELLER from the Veil Nebula
SIDEMAN'S COMPANIONS (up to three)
INTERLUDE PLAYER：A SERVANT of the Master of the Universe.
CHORUS (six to eight members)
Four MUSICIANS (nô flute, small hip drum, large shoulder drum, stick drum)
Two STAGE ASSISTANTS
PLACE：The remains of the planet Earth
TIME：Sometime after the end of the world

漂炎

ジャニーン・バイチマン・作
大岡信・訳

登場人物
前シテ：女 (化身)
後シテ：地球最後の人間 (亡霊)

ワキ：ヴェイル星雲からの旅人
ワキ連：その従者 (三人まで)
間：大宇宙のあるじの召使

地謡 (六ないし八名)
囃子方

後見
場所：地球の残骸
時：世界終焉後のある時

..... ACT ONE .....

— 1 —

The shrill sounds of the nô flute coming from backstage announce the drama's beginning. The narrow five-colored curtain at the far end of the Bridge is raised and the MUSICIANS, excepting the stick drummer, enter along the inner edge of the Bridge. Then the CHORUS and STAGE ASSISTANTS enter from the Side Door. To the Prelude Music, the five-colored curtain rises once more and the SIDEMAN and COMPANIONS, unmasked and simply dressed, enter slowly across the Bridge, go to center stage, and facing each other, sing.

[Prelude Song]
SIDEMAN and COMPANIONS：

The afterlight of creation, invisible to the eye,
Thea fterlight of creation, invisible to the eye,
Still sounds throughout the Universe.

[Refrain]
CHORUS：

The afterlight of creation, invisible to the eye,
Still sounds throughout the Universe.

(SIDEMAN and COMPANIONS walk slowly forward and face the audience.)

[Self -Introduction]
SIDEMAN：

We come from the Veil Nebula in the Milky Way Galaxy. For millions of years we have searched the Galaxy and beyond for signs of other life, but have found nothing. Recently, however. we have discovered that life once existed on Earth, a planet of the long lost Solar System. So we are about to transform ourselves into light and depart for Earth's remains.

(SIDEMAN and COMPANIONS face each other.)

[Travel Song]
SIDEMAN and COMP ANIONS：

Breathing in the light of a million stars,
Breathing in the light of a million stars,
Light-eaters of the skies, we turn to rainbows,
Rivers coursing through the veins of infinity.

(SIDEMAN faces front, takes a few steps forward, and

〔 前場 〕

— 1 —

鋭い笛の音が鏡ノ間より劇の開始をつげる。笛，小鼓，太鼓は橋がかりより，地謡，後見は切戸口より登場。「次第」につれてワキ，ワキ連，橋がかりより登場。素面で衣裳も簡略，舞台中央までゆるゆる進み，互いに向かい合ってうたう。

〔 次第 〕
ワキ，ワキ連

あめつちの創造の残んの光よ，目には見えざれ
あめつちの創造の残んの光よ，目には見えざれ
いまもなお宇宙のはてへ波うてり

〔 地取 〕
地謡

あめつちの創造の残んの光よ，目には見えざれ
いまもなお宇宙のはてへ波うてり

（ワキ，ワキ連ゆるゆる前進，正面に向く。）

〔 名ノリ 〕
ワキ

これは銀河系宇宙なるヴェイル星雲より来たりし者。おもえば幾百万年かけて，銀河系の内に外に，われらはくまなく探し求めてさまようた，われらのほかなる命のしるしを。むなしきしわざよ。しかるに近ごろ，われらは知った，いまは消えて跡かたない太陽系の，地球なる惑星上にかつて命の存在せしこと。さればこれより，われらみずから光と化し地球の残骸（むくろ）へ出立せん，出立せん。

（ワキ，ワキ連に向き合う。）

〔 道行 〕
ワキ，ワキ連

百万の星の光に息づいて
百万の星の光に息づいて
全天の光を食らって生きるわれら，虹に変ぜん
そは無限なるものの血脈の中を流れる河ぞ

（ワキ，正面を向き数歩前進。語りを終えると，地球

then returns to his original position as the passage ends, signifying their arrival on Earth.)

への到着をあらわすように，元の位置にもどる。)

In and out of years, past worlds
Muffled in the hiss of falling stars,
Back and up, out and down,
We ride the back of turtle time
Until it brings us to foreign shores,
The ruins of an ancient world.
Here drifting fires slowly bob on darkness
Like beacons cast out upon the sea by a shipwrecked race.

These are the flames that once were Earth,
These are the flames that once were Earth.

幾年も幾年もあまたの世界を過ぎた
流れ落ちる星のざわめきにつつまれ
時間と空間のひずみに揺られ
我らは浦島のように亀の時間の背に乗って
見知らぬ岸辺へ運ばれる
そこは太古の世界の残骸
漂う炎が暗黒に浮かび上がる
難破した民が放ったのろしのように

それは炎　昔　地球であったところ
それは炎　昔　地球であったところ

[Arrival Lines]
SIDEMAN：
With the speed of light, we have arrived at the remains of Earth but find only flames. Let's return to our usual form and take a rest before looking around.

(SIDEMAN and COMPANIONS kneel on one knee beside the downstage lift pillar, in front of the CHORUS, facing the bridge.)

〔着きゼリフ〕
ワキ
光の速さで我らは地球の残骸に着いたが，一面の炎ばかり。あたりをうかがう前に，元の姿にもどり，一休みすることにしよう。

(ワキとワキ連は，地謡前の脇の座に片膝たててすわる。)

— 2 —

(DOER enters over the Bridge, wearing the fukai mask of a grieving middle-aged woman and a costume of red, gold, and orange brocade. She stops at the First Pine, facing the stage.)

— 2 —

(シテが登場。深井の面——悲しみに打ちひしがれた中年女をあらわす——と，華やかな模様のにしき織を着用。舞台に向かって一の松に立つ。)

[Recitative]
DOER：
Choked by the heat of the Sun,
The Earth has become a flame
Within darkness,
Hell suspended in the void.

(Moves onto the stage and turns slight1y stage front.)

〔サシ〕
シテ
太陽の熱に喎(むせ)んで
地球はいま
暗黒の内なる炎
虚空に浮かぶ地獄なる

(舞台に入り舞台正面の方に向く。)

O Sun! You warmed our days,
The Moon and the stars
Brightened our nights.
Now they are gone,
All gone.
Fire, only fire,
Only you are mine.....
And the aftertaste of love,

おお　太陽よ　そなたはわれらの日々を暖め
月と星は
われらの夜を輝かしめた
今　日も月も星も絶えて
一切が死に絶えて
炎よ　ただ炎のみ
ただ汝のみわがものとなる……
この地球という溶けてゆく塊の上

(Turns stage front)

[Low-Pitched song]
Endless
As my life
On this melting frame of earth.

[High-Pitched Song]
I do not want to see it ! I do not want to see it !
Tell the night to come.
I do not want to see the flames, Earth's blood !
I walk alone
In the black light full of tears,
Trailing memories and fallen stars.

(Goes to center stage)

O world that I once loved,
Dying, dead,
Before my eyes,
Dying, dead,
Before my eyes !

(IROE DANCE)

— 3 —

(SIDEMAN approaches DOER.)

[Spoken Dialogue]
SIDEMAN：
I see something move among the flames. Can it be alive ?
(To DOER：) We are travellers from the Veil Nebula, come in search of the remains of Earth.

(DOER slowly pivots to face him, and stares in silence.)

What form of life are you ?

DOER：
Earth..... How can you know of Earth ?

SIDEMAN：
We have studied it from afar. To find you here astounded us, for we thought Earth's creatures were all extinct.

(舞台正面に向く)

〔 下ゲ哥 〕
わが命さながらに終わりなき
愛の残り香だけを残して

〔 上ゲ哥 〕
見たくはない！ 見たくはない！
夜よ来たれ
炎など見たくはない，地球の生き血ぞ！
ひとり　私は歩く
涙に溢れる黒い光の中
思い出と落ちゆく星星を引きずりながら

(舞台中央へ行く)

おおそのかみ　心より愛した世界よ
死にかけている，私の前で
死んだ世界よ
死にかけている，私の前で
死んだ世界よ！

〈イロエ〉

— 3 —

(ワキ，シテに近づく。)

〔 問答 〕
ワキ
炎の中で何物かが動いているようだ。生き物だろうか。
もしもし，我らはずヴェイル星雲より到来せる旅人，地球の残骸を捜索に来たのです。

(シテ，振りかえってワキを見つめる。無言。)

あなたはいったい，どういうお方でございましょう。

シテ
地球……地球についていったい何をご存じでしょう。

ワキ
遥か彼方で調べていました。あなたにここでお会いするとはなんという驚きでしょうか。地球上の生物は絶滅したと思っていました。

DOER：
The Earth is dead. Go back to where you came from.

SIDEMAN：
We can not. We must study Earth in order to understand ourselves. We are part of the same Universe.

DOER：
If you are, then speak to me of its beginnings.

SIDEMAN：
It began we know not when, and so we say, " Out of Nothing " and " At the moment of Creation, that first, mysterious happening, forever repeated, forever lost in time. "

DOER：
And the stars and galaxies ?

[Shared Sung Dialogue]
SIDEMAN：
When seething clouds of fire and ice,
Spurting outwards from the Source,
Like blazing eyes to light the dark,
Surged and eddied across the skies

DOER：
And as they aged, grew dense and
Rooted, rounded

SIDEMAN：
Into galaxies and stars
That hung upon the darkness of the void

DOER：
Like jewels upon the cheek of night

SIDEMAN：
And lived, then died

DOER：
And dying, came new galaxies

SIDEMAN：
And stars of which

シテ
地球は死にました。お戻りください，もと来た所へ。

ワキ
いえ，戻りませぬ。われらはわれらみずからを知るために，地球を知らねばなりませぬ。同じ宇宙の仲間ですから。

シテ
仲間なら，語ってみられよ，そもそもの宇宙の起源を。

ワキ
起源のことはわかりません。だから我らは言います。「宇宙は虚無より生じたり」とか，「創造の瞬間，その最初の神秘なる出来事，とこしえに繰り返され，時間の中でとこしえに失われるもの」と。

シテ
では星や星雲の起こりは？

〔掛ケ合〕
ワキ
煮えたぎった炎と氷の雲が
源泉から外へ向かって勢い猛に噴けあげ
暗闇を照らす燃える瞳のように
空に波打ち，うず巻いていった

シテ
そしてそれらは年経るにつれ
密度を増し，定着して丸くなり

ワキ
星雲となり星となる
大いなる虚空の闇に浮かんで

シテ
夜の頬にかかる宝石のように
星は生きて

ワキ
生きて　そして死ぬ

シテ
死んで行くとき，新しい星雲は生まれ

ワキ
星が生まれる　その中で

DOER：
Our Sun was

DOER and SIDEMAN：
One：

(They take a step toward each other.)

[High-Pitched Song]
CHORUS：
A great blind bird,
Grown from the ruins of a burnt-out star.
Caught and cradled
In a thick web of gases floating in space,
Its light streamed across the skies
Like angels' hair upon the wind,
A sight too beautiful to be borne,
Too beautiful to be borne.

SIDEMAN：
Please tell me how your people came to be and how they ended.

— 4 —

(DOER goes to center stage, and kneels on one knee.)

[Turning Song]
DOER：
For countless eternities

CHORUS：
A halo of icy crystals and shimmering stones
Circled the Sun.

[Recitative]
CHORUS：
From it Earth and the other planets formed,
Then life emerged from the seas and finally
The crown, the blossom of all,

DOER：
The first human being,

[Melodic Song]
CHORUS：
Carved out of eternal matter
And the light of vanished stars,
In the morning thick like milk

シテ
我らが太陽

ワキ，シテ
も，生まれた

（一歩互いに歩み寄る。）

〔上ゲ哥〕
地謡
偉大なる盲目の鳥よ
燃え尽きた星の残骸より生じ
宇宙に漂う厚い網目のような
ガスの中で捕らえられ，育てられ
光は空を横切って流れる
風にまたがって飛ぶ天使の髪の毛のように
それはたえがたく美しい光景
たえがたく美しい光景

ワキ
では，あなた方が，どのように生まれ，どのように滅んだのか，聞かせて下さい。

— 4 —

（シテは舞台中央に進み片膝たててすわる。）

〔クリ〕
シテ
限りなき久遠の時を

地謡
氷の結品そしてきらめく石のまどかな光は
太陽をめぐって回った

〔サシ〕
地謡
そしてそこから地球とほかの惑星が形作られ
生命は海から生まれ，ついには
万物に冠たる生物の一切のうちの花なるもの

シテ
最初の人間存在があらわれた

〔クセ〕
地謡
永遠なる物質と
失われし星の群れの光とから作られたもの
乳色の朝　驚きにみちた瞳で

Looked up at the sky
With wondering eyes, and with naked foot
Walked the Earth and found it good.

We were twins to Sun and Earth,
Children to the beginning of time.
The light and matter born
At the moment of Creation
Metamorphized from world to world
And became our flesh and bones.
We were born with the memory
Of worlds unknown.

Then bi1lions of years passed and the Sun,
Like any star, began to die.
It swelled in the skies,
A ball of fire ready to burst and bury the world.
The seas boiled over, streets were slippery
With the cries of victims and madmen.

DOER：
We knew the earth would be choked in fire
And become a flaming hell.

CHORUS：
The Earth's glass dome split and shattered
And burning air poured in.
Those who could, fled,
But most were lost.
For centuries the sky was a forest of bones
And after only fire and ash.
Except for one old woman, beyond age,
Beyond fear, who stayed behind
To keep a pact with the Earth,
With the Sun, with the stars.

空を見上げ
裸足(はだし)で地面を歩いた
その心地良さ

我らは太陽と地球の双生児　そして
時の劫初の子ら
天地(あめつち)の創造の時
生まれ出た光と物質は
幾世を経て変形し
我らが骨肉となった
我らは生まれた
未知の世界の記憶とともに

かくて何十億年が過ぎ
太陽は他の星同様滅び始めた
空の中で膨張し
世界を爆破し葬ろうとする火の玉となった
海は煮えたぎり
街は犠牲者と狂人の叫び声で塗りこめられる

シテ
我らは知っていた　やがて地球は炎に封じられ
燃える地獄と化すであろうと

地謡
地球のガラスの丸屋根は割れ，砕け
燃える空気が流れ入り
逃げられる者は逃げおおせたが
ほとんどは死に絶えた
何世紀もの間空は骨の森だった
やがて炎と灰のみここに残った
ただひとりの老女をのぞいて
おお寿命を越え　恐怖を越え
陰にかくれたままなる老女
地球との太陽との星との契りを守らんとして

— 5 —

[Sung Dialogue]
DOER：
Walking alone
In the afternoon full of fire and death,

CHORUS：
Dragging the soil and its roots,
A sleeping cadaver,

DOER：
I disappeared

— 5 —

〔ロンギ〕
シテ
炎と死の溢れる午後
ただ一人歩みゆく

地謡
土とその引き抜かれた根をひきずりながら
眠れる屍(しかばね)

シテ
私は消えた

Into the flames

CHORUS：

Carrying the memory of the world.
" I was the last human being, " she said,
And melted into the drifting flames.

(DOER slowly exits over the bridge, leaving SIDEMAN and COMPANIONS on stage.)

INTERLUDE

(Interlude Player enters along the Bridge,)

INTERLUDE PLAYER：

I serve the Master of the Universe. Travelling ceaselessly around the Galaxies, I record the births and deaths of worlds. According to my records, the planet Earth dissolved uncountable ages ago, but just now, as I was passing by its ruins, the fragrance of tears came to me, mingled with the drifting flames. Since all life on Earth should be gone by now, I thought it strange and have come here to seek the cause.

How pleasant to gaze on these lovely flames !

What ! There is someone else here, too. I have not seen you before. Who might you be and from where have you come?

SIDEMAN：

We are travellers from the Veil Nebula, come in seach of the remains of Earth. And who are you ?

I. PLAYER：

I serve the Master of the Universe. Travelling ceaselessly among the Galaxies, I record the births and deaths of worlds.

SIDEMAN：

Then there is something I would like to ask you. Would you please come closer ?

I. PLAYER：

Yes, certainly. (Goes to center stage, sits down.) What would you like to know ?

SIDEMAN：

How did Earth begin and how did it end ? And when

炎の中に

地謡

世界の記憶をわが胸に
「我は最後の人間なりき」そのように告げ
漂う炎の中に溶けていった

(シテはゆっくりと橋がかりを退場。舞台にワキとワキ連を残して。)

—間狂言—

(間，橋がかりより登場。)

間

これは大宇宙のあるじにおつかえ申す者，片時の休みもなく銀河系宇宙をめぐり旅しておりまする。ありとある世界の誕生と死は私の記録いたすところ。さてわが記録によりますれば，惑星地球はすでに永劫の昔跡かたもなくなりし星，しかるにいま，この星の残骸を通りすぎれば，漂う炎にまじり合って，ふと涙の香りが鼻についたのでござる。こはいかに，地球のすべての生類は，絶滅しはてたはずなるを，いざこのわけをたずねんと，かくは立ち出でたる次第にござる。

このいとも麗わしい炎を見るのは，何と愉快なことでござろう。

やや，もう一人ここにおられる。見知らぬお方じゃ。さて，いかなるお方なるや，していずこよりお出でなされしや。

ワキ

われらはヴェイル星雲より，地球の生き残りを探しに参りし者。して，どなた様でございましょうや。

間

これは大宇宙のあるじにおつかえ申す者。片時の休みもなく銀河系宇宙をめぐり旅しておりまする。ありとある世界の誕生と死は私の記録しますところ。

ワキ

さすれば，少々おたずねいたしたきことがござる。ささ，もっと近くへお寄り下さいませぬか。

間

心得ました。(舞台中央に行って，すわる。) して，おたずねのおもむきは。

ワキ

地球はいかにして誕生し，いかにして消滅せしや。ま

it ended what happened to the beings who lived here ?

I. PLAYER：

You ask an unexpected question !

It happened very long ago and I no longer remember the details. But when you have come all the way from the Veil Nebula it would be unkind to say I know nothing about it, so I will at least tell you the story as far as 1 remember it.

SIDEMAN：

Please do so.

I. PLAYER：

Long, long ago, there was an old star called the Sun. For countless eternities a halo of icy crystals and shimmering stones encircled it, then finally took shape as the planets of the Solar System：Pluto, Neptune, Uranus, Saturn, Jupiter, Mars, Venus, Mercury—and this one, Earth. Earth grew a covering, of plants and trees and rocks. Water and air filled its empty spaces. Then the creatures of sea and land came to fill the water and the air and to move among the plants and the trees and the rocks. Of all Earth's creatures, human beings were the last to emerge, but soon they ruled all the rest.

That was Earth's beginning. As for its end：It came with that of the Sun. After billions of years, the Sun began to grow hotter. It swelled with fire. Little by little, it closed in on Earth. And Earth, helpless to change its orbit, grew hotter and hotter. Finally, Earth could fend off no longer the Sun's fiery embrace, and it burst into flames. These (gestures.) are the remnant of that terrible last conflagration.

As for Earth's creatures, we think that they all must have died then, but we have never known for sure. In the flux and shifting of matter in the Universe, even I can not know everything.

SIDEMAN：

Thank you very much. It is a most interesting story. But may I ask you one more question ?

As we were resting after our long journey here, a strange creature emerged from the f1ames, singing sadly to itself. Since we knew Earth ended long ago, we were astonished. When we approached the creature, it did not answer at first. But when we spoke of Earth,

た地球滅尽のとき，ここに住みたりし生類はいかなるさまに相成りしや，お教え願いとうござる。

間

何と思いも寄らぬお質(たず)ねでござる。

遙かなるいにしえの出来事，こまかなことはもはや記憶にござらぬが，はるばるヴェイル星雲からお出でとのこと，何も知らぬとのみ申すのも心無きしわざでござろう。されば私の思い出しうる限りのことを申しあげてみましょう。

ワキ

なにとぞお願い申す。

間

はるかなはるかな昔，太陽とよぶ古い星がございました。数えきれぬ永劫の歳月をかけて，氷の結晶，また微光を発する石くずの群れが，太陽の周辺を暈のように取り巻きました。そしてついに太陽系惑星群となりました。すなわち冥王星，海王星，天王星，土星，木星，火星，金星，水星—そしてこの星，地球でござる。地球は植物，樹木，岩石に覆われました。水と大気はからつぼの空間を充たしました。ついで生まれた海と陸の生物は，水と大気を充たし，また植物，樹木，岩石をぬって移動しました。地球のすべての生物のうち，人類は最も遅れてあらわれましたが，たちまち残余の一切のものを支配するにいたりました。

これが地球の始まりでござる。さてその終りはいかんとならば，それは太陽の終りとともにやってきました。何十億年経つうちに，太陽はどんどん熱して参りました。炎でふくらみはじめました。少しずつ，地球に接近して参りました。して地球は，軌道変更もままならず，熱く熱くなりまさり，ついに太陽の苛烈なる抱擁を防ぐすべなく，みじんに飛び散り，炎と化してしまいました。ここに漂う麗わしい炎は，すなわちこの恐るべき最後の大火の残り火でござる。

地球上の生き物は，一つ残らず死に絶えたものと存じまするが，たしかなことは不明でござる。この大宇宙の有為転変におきましては，私とてもすべてのことを知ることはできませぬゆえ。

ワキ

これはこれは有難うござる。さても面白いお話でござった。ところで，もひとつおたずねしてもよろしうござるか。

長の旅路のはて，われらがここに休憩いたしておりましたところ，不可思議なる生き物が，悲しげに低く唱いつつ，炎の中から立ち現れたのでござる。地球はとうに絶滅したのを知っておりましたゆえ，われらはいたく驚

the creature seemed to come alive and told us the story of Earth and the human race, just as you have. Then it suddenly confessed it was the ghost of the last human being and disappeared into the drifting f1ames. What can this mean ?

きました。近づきますと，はじめは何も答えようとはしませんでした。されどわれらが地球について話しますと，その生きものに生気がよみがえり，ただいまのそなた様のお話同様，地球ならびに人類の物語をば語ったのです。ついでとつぜん，そのものは，我れこそは地球最後の人間の亡霊ぞと明かしたるのち，漂う炎に姿を消したのでござる。これはさて，いかなる意味でございましょうや。

I. PLAYER：

You have seen a miracle !

Now I see why the fragrance of tears filled the flames. The spirit of the last human being still lingers here in sorrow. She must have been overjoyed that someone came all the way from the Veil Nebula, and when she heard you speak of Earth, it brought back memories. She wished to tell you about the ancient things that filled her heart and so she took the shape of a ghost. If you wait, I think you will witness another miracle.

間

そなた様は奇蹟を見たのでござる。

涙の香りが炎を充たしていたわけも，今こそわかり申した。人類最後の者の霊が，今なお悲嘆にくれてこのあたりをさまよっているのでござる。して，ヴェイル星雲よりはるばる来たりし何者かに出会って，さぞかし歓喜のきわみとなったのでございましょう。そなた様が地球のことを話すのを聞き，記憶がよみがえったのでござろう。かの霊は胸に詰まった古き事どもを語らんと願い，亡霊の形をとって現れたのでござる。今しばらくお待ちあれ。必ずや次なる奇蹟が起こることでございましょう。

SIDEMAN：

I understand now. We will stay here and wait for her to appear again. Thank you very much for your help.

ワキ

心得申した。この場にとどまり，女の霊がふたたび立ち現れるのを待ちましょう。あつくおん礼申しあげまする。

I. PLAYER：

Not at all. I must be off now. If I can do anything more, please tell me.

間

いや何の。さて，もう行かねばなりませぬ。また何かご必要がありますれば，どうぞお呼び下さいますよう。

SIDEMAN：

Yes, we will.

ワキ

はい，その節はくれぐれもよしなにと。

I. PLAYER：

Very good. I wish you well.

間

ではこれにて，ごめんください。

(I. Player exits over Bridge, singing.)

(間，橋がかりより退場。)

..... ACT TWO .....

〔後　場〕

— 1 —

— 1 —

[Song of Waiting]

SIDEMAN and COMPANIONS：

Shadows of fire redden the darkness,
Shadows of fire redden the darkness,
Faint as our hope.
" O let her return ! ", we pray,
But the roar of the wind buries our voices.
We lay down our heads on pillows of flame and
Wait for the ghost to appear in our dreams,

〔待謡〕

ワキ，ワキ連

炎の影は闇を染め
炎の影は闇を染め
我らの望みのようにかすか
我らは祈る「女を戻らせたまえ」と
けれど声は風のうなりにかき消される
炎の枕に頭を横たえ，我らは待つ
亡霊が夢に姿を見せるのを

Wait for the ghost to appear in our dreams.

— 2 —

(DOER enters by the Bridge, stops at the First Pine, and looks out at the audience over the Bridge railing. Dressed in robes of blue and violet, she wears the uba mask of an aged woman and carries a cane.)

[Introductory song]
DOER：
Infinite air,
The morning thick like milk,
Sweet matter.....
Salt, dust of the sea,

[Recitative]
My tongue received
A kiss of the night sea
From you.....

CHORUS：
Earth, my earth.....
So beautiful even angels came down
To bathe in your clear waters.

DOER：
Now you are gone, yet I have come
For this is all that I have left of you.

[Song to Stick Drum Accompaniment]

(slightly lower in pitch, meditatively)

My sorrow is so wide
I can not see across it；

CHORUS：(still lower.)
And so deep I shall never
Reach the bottom of it.

In the heart's thicket we travel across
A summer of tigers.

— 3 —

(DOER enters stage proper.)

[Song]

亡霊が夢に姿を見せるのを

— 2 —

（シテ，橋がかりより登場。一の松で止まり，欄干より観衆を見渡す。老女を表す姥（うば）の面と，青と紫の衣を着用し，杖を持つ。）

〔一セイ〕
シテ
無限なる大空よ
溢れ流れる乳のごとき朝よ
甘美なる物質よ……
塩よ海の花粉よ

〔サシ〕
わが舌は
そなたから受けた
夜の海の口づけを……

地謡
地球よ，わが地球よ……あまりその美しさに
天女さえ，そなたの澄んだ水で
沐浴するため降りてきた

シテ
今そなたは去った，けれど私はやって来た
私がそなたからとどめ得たのは　ただこれだけだから

〔ノリ地〕

（やや低めに，瞑想的に）

わが哀しみは広くして
きわまる果てを見るよしもなく

地謡（さらに低く）
わが哀しみの深さゆえ
きわみの底を知るよしもなし

心の茂みの中，我らは旅する
トラさながらの獰猛の夏を

— 3 —

（シテが舞台に入る。）

〔哥〕

DOER：
After the Beginning,

CHORUS：
After the Beginning,
There were many beginnings,
For with each child's birth,
A new world was born.

DOER：
Child, you came in among melted mists,

CHORUS：
You grew inside me.
Warm milk, river of life,
Flowered from my breasts and in your eyes

DOER：
As you sucked I saw
Green branches,

CHORUS：
Sunlight caressed,

DOER：
And in the night I listened

CHORUS：
To secrets, to dreams,
To love in your eyes.

DOER：(sung lower, more melodically)
The world was bluer
At night when I slept,
Enormous, in your small hands.

(DOER goes to center stage.)

CHORUS：
And before the End,
There were many ends,
For each time a human being died,
A world was lost.

[Shared Sung Dialogue]
DOER：
I was the starving child,
Belly distended,

シテ
あめつちの初めこのかた

地謡
あめつちの初めこのかた
数知れぬ始まりがあった
嬰児(みどりご)が生まれるごとに
新しい世界がひとつ生まれたから

シテ
嬰児よ，おまえは淡いかすみの奥からやって来て

地謡
私の内で育った
あたたかい乳，生命の川は
私の胸からあふれた

シテ
おまえが乳を吸うとき，その瞳には

地謡
日の光に愛撫された
緑の枝々が見え

シテ
その夜には　おまえの目に

地謡
私は聴いた秘密の数々
夢の数々　そして愛を

シテ（低く謡う，さらに美しい調子で）
世界の青みはいや増した
おまえの小さい手の中で
巨大になって　夜この私が眠るとき

（シテ，舞台中央へ行く。）

地謡
あめつちの終焉の前に
数知れぬ終わりがあった
人が一人死ぬごとに
一つの世界が死んだから

〔掛ケ合〕
シテ
私は餓えたる子
腹はふくれ

CHORUS：
Bones like thread,
Who died in her mother's arms.

DOER：
I was the man weeping blood

CHORUS：
Who let himself be stretched on the rack
And roasted alive for love of God.

DOER：
I was the mother lost in childbirth

CHORUS：
Whose soul ascended the clouds like a bird,
A pillar of smoke for a shroud.

DOER：
Come down to be born again, my sister !

CHORUS：
Give me your hand from the flames, my brother !

DOER：
Cleave your bodies to mine like magnets !

CHORUS：
Flow into my veins, into my mouth !

DOER：
Speak through my words and through my blood !

(The following lines should echo as if heard from the depths of a cave.)

I am stone：dark stone.
I am air：bright air.
I am the Beginning,
And I am the End.
I am the End.

(ON-STAGE COSTUME CHANGE)

— 4 —

[Recitative]
DOER：
Now the Earth is turning and turning with it,

地謡
骨は糸のごとく，
母の腕の中で私は死んだ

シテ
私は血の涙を流す男

地謡
拷問台にはりつけられ生きたまま焼かれた
神への愛のため

シテ
私は子を産むときに死んだ母親

地謡
魂は鳥のように雲に乗る
一条の煙りが私の死装束

シテ
妹よ　もう一度生まれるために降りておいで

地謡
弟よ　炎の中から私に手をさしのべておくれ

シテ
磁石のように私に身体をくっつけてごらん

地謡
静脈の中に，口の中に，流れ入っておいで

シテ
私の言葉，私の血を使って話してごらん

（以下の文句は，洞窟の深みから聞こえるかのように，響くのが望ましい。）

我は岩なり，暗き岩
我は大気なり，明るき大気
我は一切の始まりなり
我は一切の終焉なり
一切の終焉なり

〈物着〉

— 4 —

〔サシ〕
シテ
見よ，地球は廻る

I shall dance.

CHORUS：
Watch me now, and remember the world !
Watch me with tears,
Watch me with joy !

(DANCE OF THE UNIVERSE)

(After the dance is over, the DOER continues to move about the stage to the singing and music.)

[Song to Stick Drum Accompaniment]
DOER：
Her frail feet floated on the wind,

CHORUS：
Her frail feet floated on the wind, unheeding,
A drifting cloud,

DOER：
A flame that flickers and is out.

CHORUS：
She danced
In memory of the world,
Sleeves twirling amid the clouds.
And as she danced,

DOER：
And as she danced,

CHORUS：
The flames thinned and fell away.
Gossamer clouds with tails of fire
Spiralled slowly through space.
Here and there blue and violet gases
Gleamed in the light of distant stars
Then disappeared,
Like foam upon the midnight sea.

— 5 —

(The DOER looks offstage toward the bridge,as though drawn by something heard there.)

[Closing Song]
DOER：
From far across the River of Heaven,

地球とともに廻りつつ，我も舞わん

地謡
されば我を見よ，見て憶いおこせ，この世界を！
涙しつつ我を見よ！
よろこびつつ我を見よ！

〈宇宙の舞〉

（舞い終えた後，シテは地謡と交互に謡い交わしながら，舞台で動く。）

〔ノリ地〕
シテ
女のか弱い足が　風邪に浮かぶ

地謡
女のか弱い足が　風に浮かぶ　我を忘れて
そはひとひらの漂う雲

シテ
ゆらゆら明滅する炎

地謡
女は舞う
この世を思い出すために
雲の間をめぐる袖
女の舞につれて

シテ
女の舞につれて

地謡
ちりぢりに炎は消え去る
炎の尾を引く幽かな雲が
空をゆるゆる旋回した
ここかしこ，青と紫の気体が
遠い星の光にきらめき
かつ消えた
深夜の海の水泡（みなわ）のごとく

— 5 —

（シテは舞台外の橋がかりの方を見る。そこで何かが聞こえたのに気を取られたかのように。）

〔キリ〕
シテ
天の河のはるか彼方より我は聞く

I hear the plovers' faint, cold cry —
Or is it only the endless echo
Of the Great Beginning ?

千鳥のかすかな冷たい鳴き声
いえ，それは大いなる初まりの
絶え間ない響であろうか

CHORUS：

Earth's atoms drifted through space,
Carrying fragments of memory into the darkness.
"And I shall go too, I shall go with them, "
She said, and stepped out into the Galaxy.
She mingled with the swirling clouds and disappeared.
Mingling with the swirling clouds, she disappeared.

地謡

地球の原子はさまよいながら宇宙へ散った
暗黒の中へきれぎれの記憶の群れを運び去った
我も行こう　共に行こう
女はかく告げ，銀河に足を踏みいだせり
うず巻く雲にまぎれつつ消え去れり
うず巻く雲にまぎれつつとこしえに消え去れり

(The music stops, and the DOER exits in silence slowly over the bridge. The SIDEMANand COMPANIONS follow. Then, through the Side Door, the CHORUS and the STAGE ASSISTANTS, and last, over the Bridge, the MUSICIANS.)

(楽の音やみ，シテはゆっくりと橋がかりを退場。続いてワキとワキ連。そして，切戸口から，地謡と後見が退場，囃子方は橋がかりを退場。)

Author's note：Classical Nô often quote from or allude to earlier literary works and religious texts. Sometimes such quotations and allusions are meant to evoke the world of the earlier work in the context of the newer one, but at other times they simply enrich the present work without necessarily requiring appreciation of their origins to achieve their full effect. In either case, they contribute to the variety of diction and tone that characterizes the language of classical Nô. In an attempt to suggest this richness, I deliberately used many quotations (mostly brief phrases) and allusions in Drifting Fires. They are (in the order in which they appear in the text) from the works of the following writers：Komparu Zenchiku, Federico García Lorca, Pablo Neruda, Robert Jastrow, Shakespeare, Ooka Makoto, Zeami Motokiyo, Kakinomoto Hitomaro, Kenneth Rexroth, Kôjirô Nobumitsu, and Ki no Tsurayuki. There are twenty-three all together, with the largest number (12) being from Neruda. A detailed listing is given with the text of the play as published in *Asian Theatre Journal* (University of Hawaii Press) , Vol. 3, No.2, Fall 1986, pp.233-259.

作者註

古典能は多様な言いまわし，調子を用いており，それ以前の文学作品や教典からの引用や引喩を自由に駆使しています。この豊かさを示唆する試みとして，私は多くの引用（ほとんど短い句）や引喩を「漂炎」の中に取り入れました。以下，引用順に作者を列記します。

金春禅竹，フェデリコ・ガルシア・ロルカ，パプロ・ネルーダ，ロバート・ジャストロー，シェイクスピア，大岡信，世阿弥元清，柿本人麻呂，ケネス・レクスロス，小次郎信光，紀貫之。

引用は全部で 23 箇所あり，最も多く使用しているのはネルーダの作品からの 12 箇所です。詳しい註のリストは，この作品の台本が第三巻二号 (1986 年秋) の ASIAN THEATRE JOURNAL (ハワイ大学出版会) に出版された際に明示しました。

(川村ハツエ『能のジヤポニスム』かりん百番 12, 七月堂 , 東京 , 1987 年より転載)